

幕末明治の写真師列伝 第五十九回 内田九一 その二十四

東京都写真美術館編『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 I. 関東編 研究報告』(東京都写真美術館、2007年)所収の、ルーク・ガートラン博士「希有な才能と手腕と熱意をそなえた日本人写真家」内田九一と外国人常連客」によれば、1875年8月24日の外国語新聞(『The Japan Mail Daily Advertiser6, no.198』第三面以降、同紙vol.6, no.234 第四面まで毎日掲載)にも以下のような広告を出している。

「PHOTOGRAPHS A Varied Stock of Photographs, consisting of Landscapes, Views of places of note, and portraits of prominent men, taken by the undersigned. The Public is invited to an inspection of these. UCHIDA, Bashamichi Yokohama, August24th, 1875xvi.」

「写真 豊富な品揃えの写真 風景・名所・著名人撮影者は以下に署名のごとし 下見歓迎 内田、馬車道 1875年8月24日横浜」

これは前記の「官許 横浜毎日新聞」の広告と同じ広告を外国語新聞にも掲載したものだということである。また、同論考によれば、1876年9月28日付『The Japan Herald Mail Summary』にも以下の広告がある。

「PHOTOGRAPHS Of the most famous views in Japan ON SALE. Special Views photographed to order. Address K.Hasegawa, Late of UCHIDA, no.71, Bashamichi, Yokohama. Yokohama, Sept.28th, 1876xvi.」

「写真 日本名所の風景写真販売中 格別な景色、撮影注文に必ず K.ハセガワまで 元、ウチダ 横浜市馬車道 71 番 1876年9月28日横浜」

この広告は内田九一の弟子であった長谷川吉次郎が「横浜市馬車道 71 番」で「元、ウチダ」と名乗って、日本名所の風景写真販売、撮影をしていたことを示す広告であるが、これで内田九一の横浜市馬車道通りの写真館の責任者は長谷川吉次郎であったことが伺われる。また、刊行年は不明だが『写真 東京大銘家一覧』の中央に「浅草代地 内田九一同古賀」とあることから、内田九一の浅草代地の写真館の責任者は古賀暁であったのだろう。

また、『故内田九一先生短歴』の末文に、「故 内田清介、新井八郎、飯岡仙之助、故 長谷川吉次郎、故 古賀金吾」の順番で、内田九一の弟子たちの名が書かれていることから、「内田清介、新井八郎、飯岡仙之助」が、「長谷川吉次郎、古賀金吾」より先輩の内田九一の弟子と思われる。

内田九一の横浜市馬車道通りの写真館があった場所は、「横浜馬車通常警町七十四番地」が正しいと思う

が、この広告にある横浜市馬車道 71 番の場所は、「七十四番地」の隣りの馬車道通り沿いであることから、ここが店舗の番地なのであろう。つまり、「七十四番地」と 71 番地の敷地の全てが、内田九一の横浜市馬車道通りの写真館なのではないだろうか。71 番地は、今の馬車道通りのドトールコーヒー店のある辺りとなる。

さらに同論考による、ヘンリー・スミス・マンローという内田写真館の印象を記したお雇い外国人(鉦山技師)が息子に書き送った手紙の返事によれば、「こちらで最高の風景写真を撮る写真家は内田という…日本人で…私は 500 枚に上る彼の素晴らしいコレクションを見たことがあり…全部を買ってしまいたかった…けれども値段は 250 ドル。「一枚 50 セント、500 枚で 250 ドル - 正札販売のみ」出来栄は完璧だし、風景は被写体も見事なほど上手に選んでいて…芸術写真そのものですよ」と述べている。

内田九一は日頃、「隅田川界限に吾妻橋が一つでは不便だ。今に俺が内田橋を架けてやる」と豪語して、当時の尻とり文句(はやり歌)にも「写真は内田九一」とうたわれるほどであったという。この尻とり文句(はやり歌)は、明治 10 年(1877) 9 月 29 日付『読売新聞』に以下のように掲載されている。

「○文久元治のころに流行た尻とり文句とよみ出しハ古きを以て新らしく附會(注ルビ:こじつけ)ました是も又方今の景況を知るの一端と言ざるべからずですうな

坂本学校内 前島和橋

「誓願寺の和尚さん坊さんで、牡丹に唐獅子竹に虎、虎の剥製博物館、官軍凱歌ハもう間がない、内国博覧公園地、知識を開くち小学校、鉦山金銀よく見出し、見出そハ警視の探偵者、社説の論鋒大新聞、文明開化ハ日々進む、進むハ名医で御茶の水、水ハポンプで汲上る、上げる風船操練場、ぼくれん地獄ハ飯の蠅、廢刀不平ハ頑固武士、拳で人力めった打、内田九一ハ写真取り、取退無盡ハ御禁制、税ハ三圓猫ころりん、コロリのはやるハ神奈川県、拳ハ藤八湯の二階、海陸軍備ハ行届き、届ハ郵便電信機、新規發明皆勉強、京橋南ハ煉瓦石、化石の講中お利口連、連発じう砲教導団、団子ハ旧弊二度の月、築地に寄留ハ芥子坊主、坊主の説教樹陰気、インキをつかふち活版や、パンやの出入ハ外国人、人望得たのハ正雄さん、おさんも仮名附拾ひよみ、読売新聞日就社」といつまでやっても際限なしこころで筆を止む」

とあることから、内田九一の評判が一般にもよく知られていたことが判る。

(森重和雄)